

要旨

本研究は「日本企業の月次報告における日本語訳の誤用分析」。翻訳過程は4つの言語能力を生かせ目的語に本格的意味を伝達できるような複雑な活動でことから基づいて研究を始める。翻訳および通訳をいう活動は難しいという意見がよくあったため数の日本語を学ぶ学生は将来的に通訳者および翻訳者になるという仕事に対し興味がない人がいる。これがはじめて日本企業で勤める日本語学科の卒業者は会社にて翻訳と通訳した時にその難しいを感じたことである。

日本企業ではじめて通訳または翻訳際にどんな困り事があったか。どんな間違いをしたかという質問から基づいて研究を実施する。始めて日本企業のレポートを通訳または翻訳することで間違いがあると認識したことによる本研究は月次報告におけるインドネシア語から日本語に翻訳する際にどのような誤用が発生するか及びどんな問題が原因になったかという問題提起を明らかにする目的である。

本研究で使用する方法はケーススタディ（事例研究法）である。ケーススタディはあるケース（事例） *descriptive analysis*（記述的分析）に含まれ、それは完了するまで観察・分析するのにあるケースに集中し実行する研究である。本研究ではケースのように現象が頻繁に表示され、月次報告に焦点を当てた翻訳の誤訳である。本研究では統語論の誤用分析に焦点をし、9人の通訳者が日本企業の月次報告に書いたコメント部分の翻訳した結果を対象とした。

日本人のネイティブスピーカーによる確認した結果を4つのカテゴリーに分別する。それは、(1) 助詞の誤用、(2) 言葉の誤用、(3) 文型の誤用、(4) ソース言語を転送する意図の失敗につながる文の誤用である。そして、4つのカテゴリーから順番の番号を第三章に述べているとおりに作成する。データ分析に基づいて、日本人のネイティブスピーカーの結果に基づいて識別することで、75翻訳の誤用の合計がある。誤用はローカルエラーの形でほとんどエラーである。また、グローバルエラーの形でのエラーはソース言語を転送する意図の失敗につながる文の誤用及び漢字の誤用で良くある。その原因は迫田（2000）によると5つある。1) 言語転移、2) 過剰一般化、3) 訓練場の転移 4) 学習ストラテジー、及び 5) コミュニケーションストラテジー。その誤用原因の以外はソース語(インドネシア語)のエラーがあるので翻訳の誤用も起こる。